

武田泰淳全集

第五卷

武田泰淳全集

第五卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第五卷
昭和四十六年九月二十日 第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発行者 竹之内 静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京(五七)七六五一(代表)
振替東京 四一 一二三
郵便番号 一〇一 一九一

印刷 株式会社 三松堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72405 (出版社) 4604

武田泰淳全集

報 4
第 5 卷 付録
1971 年 9 月

目 次

戦争中のこと……………	小田 嶽夫
『司馬遷』と失業の思い出……………	後 藤 明 生
武田泰淳氏との交友記(下)……………	増 田 渉

東京都千代田区
神田小川町2の8

筑 摩 書 房

戦争中のこと

小 田 嶽 夫

戦争中の或る日、何の前触れもなく武田泰淳氏がひょっこり私のところへやって来た。それが何年であったか記憶が定かでない。昭和十六年の三月に私は「魯迅伝」を上梓したが、その直き後氏が来訪し、間もなく氏が「魯迅伝」という文章を「中国文学」誌上に書いたことははっきりしている。ただそれがはじめての来訪だったか、二度目ぐらいだったかがよくわからない。

その年の十一月に私は徴用されてビルマへ従軍したのだが、その従軍前に氏との共著「揚子江文学風土記」の私の分の原稿を書き終えている事実があり、若し「魯迅伝」上

梓後が初対面だとすると、僅かのあいだに氏といっしょに仕事をするほどの親しさが生じていたことになる。

武田氏のことは、その文章を「中国文学」誌上で時たま読んでいたので知っていた。秀才で勉強家らしいところも無論あるが、それよりも、何となく考えに自由で深いところがあつて、そこが一般の好学の士とちがう感じであつた。

そんなわけで、氏の突然の来訪は思いもかけなかったことにはちがいないが、そのことを奇異とは少しも感じなかった。今も述べたように、ただの学者タイプの人とちがって、自由な、柔軟性のある人に感じられていたからである。

それはそうと、氏はどういう気持で私のところへ来たのだらう。そのことについては、学者タイプとはちがう、もっと軟派の人間とつき会って見たい、それと、青年時三年

数カ月にわたって杭州に住んでいたことがある私と、何かと中国の話をしてみたい——そんな気持ちからではないかと莫然と思われた。

ところで、前掲の「揚子江文学風土記」だが、この仕事にはじつは私はあまり気が進まなかった。江蘇・浙江を対象とした巻もあって、これなら書きたかったが、その方はすでに担当者がきまっていて、「揚子江」が私に廻って来た次第で、これは私の不得手の地域であったのだ。

ただこの頃は戦争ももうぬきさしならないところへ来て、執筆も多分に制限されていた時代であり、気の向かない仕事ではあるが、身過ぎ世過ぎのこともあって、簡単に拒否は出来ないでいた。むろん私一人で出来る仕事ではなかったので、武田氏に協力（一々名前は明示しないが、二人で分担区域を定めて書く）してもらえるかはかつて見たところ、承諾が得られ、そこで引き受けることになったのであった。

この本は私の南方従軍中に出来たのだが、武田氏の稿は（全部ではなかったかも知れないが）従軍出発前に見た筈で、各篇大方が充実した内容のものであった。中国新文学、古典双方に対する蘊蓄が吐露されていて、しかもそれがよく消化されて、りっぱな随筆若くは読物になっていた。

私のがもともと自慢出来るものでない欠を武田氏が十分補ってくれたわけで、この出版はどうやら或る意義はあることになり、私はほっとしたが、ともかくこの武田氏の仕事で、私は武田氏の才能の全容をはじめて見たような気がした。と言っても、氏は「小説が書けそうだ」との眼力は、不敏にしてその時の私には無かった。

武田氏と会うのはいつも昼間（私も時々目黒の武田氏の家へ行くようになっていた）だったせいか、いっしょに酒を飲んだ記憶はあまり無い。もう戦争も可なり末期のことと思うが、ちょうど夕方になったので、馬橋（阿佐ヶ谷の近く）の私の家からいっしょに新宿の二幸裏の或る屋台店へ行ったことがあった。もうどここの店でも酒は一本ぐらいしか飲ませてくれなかったが、ここだけは顔が利いて相当飲めたのであった。

氏はそんなに酔ったふうにも見えなかったが、その屋台店での宴が終ると、目黒の家へは帰ろうとせず、又私といっしょに馬橋へもどり、その夜は何等逡巡することなく私のところで泊った。

これは一つの例だが、そんなふう奔放なところがあり、飄々としてもいた。又、僧門の出と関係があるのか酒

落などところもあった。ただ、今思い出すのに、或いは氏にはにかみがあつたのか、女の話、或いはエロチックな話は全然出なかった。

ところで、武田氏に関して一つの忘れられない思い出がある。それについては曾つて「逃亡の季節」という拙作の中で書いたことがあるので、少し長いがその一節を引用させてもらう。

「或る日は疲れ果てた軀を省線電車（現在の国鉄電車）に乗せていた。多分夕方だったと思う。可なり込んでい、立つ場所が七分通り詰まっていた。私は疎開の準備の雑用などに疲れていたのだが、精神的にもひどく滅入っていた。ようよう疎開まで漕ぎつけたことが、不安な生活の終幕であるよりはむしろ序幕である状態に、私は重苦しい憂愁に



昭和31年 長泉院にて

閉されていたのである。

雨っぽい、蒸し蒸しした日で、私の腋の下にはべっとり汗がにじんでいた。それが又私の気持を一層みじ

めにさせた。私は押しつぶされたようになって、ただうつむいていたのだが、ふと顔を上げて、右側の遠い先へ目を向けたとき、私は向い側のずつと向うの席に武田泰淳の掛けているのを目に止めた。三、四人連れらしく、そのうちで武田がいちばんこちらのはしりようであった。

彼は無言でまっすぐ前を向いてい、だからその横顔が私の目に止まったのだったが、その顔がはっとしたほど立派であつた。

今の彼とちがつて痩せ肉の、少し蒼白い感じの顔の輪郭が、くつきりと冴えて、眼鏡のおく目の目が生氣と理智に名刀のような光りを放っていた。薄暗い、じめじめした電車のなかで、そこだけキラリと光っている感じであつた。

（中略）

武田にたいしてこのように評価していた私ではあつたが、今日の彼の風貌のかがやきは私にはやはり意外であつた（じっさいは武田の風貌はいつもと少しも変ってはず、私が客観的に見られる立場に立つたので、はじめてその真実に気付いたのかも知れない）。私は武田のそばへ行きたい気がしたが、彼が意気軒昂としているようなのに比して、私は疲れと、蒸し暑さから来る不快と、憂鬱に、打ちのめされたようになっていたので、立ち上る気がしなかつ

た(下略)

(作家)

『司馬遷』と失業の思い出

後藤 明生

わたしは武田泰淳文学の、必ずしも忠実なる愛読者であったとはいえない。その断簡零墨に至るまで、余さず読み尽し、武田泰淳的に世界を、歴史を、人間を見、かつ考へ、かつ憤り、かつ悲しみ、かつ嘆き、かつ悟り、かつ愉しみ、といった意味においては、むしろ怠慢なる読者であったといふべきであろう。実さい、今回の全集の目録を眺めてみると、その主要作品すら半分近く読んでいないことに気づくが、わたしがいまここでべたいことは、そのような、必ずしも忠実なる読者ではなかったにもかかわらず、まさに世界はこのような形をしているのだ！とわたしの脳天に一撃を加えたものは、『司馬遷』であったということなのである。

『司馬遷』は、わたしの二度の失業の思い出と離れがたく結びついている。まず、『司馬遷』との出会いが、福岡市東公園内の図書館においてであったことは、他の場所で書

いたこともある通りであるが、わたしが何故、「世界」などという大袈裟なことを用いてそのときのおどろきを表現せざるを得ないかといえば、それは『史記』が漢代の世界史であったという理由からではなく、おそらくわたしが、大学卒業と同時に都落ちした一人の失業者であったためであろうと考えられる。

失業者というものは、世界ということを考えがちな人間なのかも知れない。しかも二十四歳だったという年齢のせいもあるろう。しかしながらそのときわたしは、卒業と同時に失業者となつて都落ちしてきたわたし自身というものをつかまえる眼を、いまだ持ち合わせてはいなかったといえる。例えば、わたしを失業者にしているこの資本主義社会というものを、憎悪したり、怨んだり、軽べつしたり、憤ろしく思つたりする一方、ゴーゴリやドストエフスキーやカフカによって何とかマルクス、レーニン主義というものを捻じ伏せようと努めてもいたわけである。

「ナベ底景氣」といわれた、昭和三十二年だった。大学卒の初任給が、確か八、九千円代ではなかったろうか。福岡市におけるわたしの失業生活は、翌年の三月、中学、高校、大学の先輩に当る日氏の紹介で博報堂に入るまで、三百五十日くらい続いたわけだが、そのうち約半分を、わたしは



昭和32年 鮎炭生麻塚飯

自転車で図書館へ通うことで過ごした。市立だろうか？
県立だろうか？ いずれにせよ木造平屋の粗末な建物で、
博多湾を睨んで立っている亀山上皇と日蓮上人の銅像のあ
る東公園の、松林の中にあつた。入館料は八円か十円、あ
るいは学生六円、一般が十二円という料金だったかも知れ
ない。とにかく半端な数字だったような気がする。

朝から出かけるときは弁当を持参したが、失業と季節の
移り変りとの関係をわたしを意識したのは、夏だった。失
業の身にもあはれは知られけり閲覧室の夏の夕ぐれ。つま
り、それまでは午後になってからあらわれていた中学生、

高校生の姿が、ある朝ば
かに目立つなと思ってい
ると、もう夏休みに入っ
たせいだったのである。

図書館からの帰りに、わ
たしはときどき、飲み屋
に立ち寄った。わたしは
一文無しであつたが、渡
辺通り一丁目の交差点附
近に一軒、そこから住の
江の方へ向つたあたりに

一軒、兄の名義で酒を飲ませてくれる店があつたからだ。

『司馬遷』に出遇つた日、わたしは二軒の飲み屋をハシゴ
した。まず渡辺通り附近のスタンドバーの方で飲み、自転
車を押して住の江の方の和風酒場へ出かけたのであるが、
そこでわたしは、兄とまちがえられて客から話しかけられ
た。それからどういふことになったのだろう？ とにかく
その晩わたしは、野間の県営団地まで歩いて帰り、翌日、
自転車を捜しに行つたのをおぼえている。

『司馬遷』によつて脳天を一撃されたわたしに返つ
たとき、決して大げさではなく、世界は変つていた。その
変化を一言でいえば、円から楕円への変化であつて、ゴー
ゴリもドストエフスキーもカフカも、またレーニンもマル
クスも、決して雲散霧消したわけではなかつたが、もはや
それらは、お互いに円形の世界において唯一つの中心たら
んとして他を否定し拒絶し合う関係として存在するのでは
なく、対立すると同時にまったく対等な価値として存在
し、かつ関係し合う、楕円形世界の「二つの中心」となつ
ていたからだ。『司馬遷』の一撃は、わたしの世界の構造
を、円から楕円に変形させたのである。

わたしは満十年間続けたサラリーマンをやめたのは、昭
和四十三年三月だった。ナベ底景氣と昭和元祿。この両極

端の時代にわたしはそれぞれ失業者体験をしたことになるが、思えば『司馬遷』にはじめて出遇つてから、十一年後になるわけだ。『ああ胸が痛い』という小説はその翌年

『文学界』に書いたものである。その小説の中の「わたし」

は、おこがましくも己れの退職を司馬遷の発憤になぞらえ、アメリカ留学に出発する友人に向つて「会社をやめたのは司馬遷のためだ」などと口走るが、壮行会で酔つて帰宅した翌日、とつぜん原因不明の発熱に見舞われ、胸の痛みをおぼえる。小説の中に『司馬遷』の文章を引用したことについて、「ずいぶん大胆不敵なことをしたもんだ」と某知人からいわれたのをおぼえているが、胸の痛まない発憤が、果していかなる時代により得ようか。

「イエス・キリストが生誕されるよりも前に、かの司馬遷という男は、男らしくもこの難問に立ち向い、そのけなげな姿勢と大きな影は、無気味な日蝕の如く、現代の我々の日常の上におおいかぶさっている」

『司馬遷』一九六五年講談社新版の序文に、武田泰淳氏はそう書いているが、真実の「男らしさ」のために、自らの「男性」を葬つて生きながらえた司馬遷の逆説と論理は、そのまま現代への批評であるようにさえ見える。

武田泰淳氏との交友記(下)

増田 渉

泰淳氏が小説家になろうとは、はじめは予想もしなかった。『司馬遷』に見るように、研究的評論家、あるいは評論的研究家になつて、在来わが国に欠けていた中国文学に、前人未踏の世界を拓くのではないか、という気がしていた。だからあるとき、それは小説家になつて数年、しきりに書いているころのことだが、一しよに酒をのんでいて、「君が小説家になるとは思わなかった」と私がいったら、「俺もそう思う」と氏は答えた。あるいは本音(?)だったかも知れないと思う。そういえば、私自身としては、小説にも面白いものがあり、すぐれた表現力の才能にめぐまれた作家だとも思うこともあるけれども、それにもまして、泰淳氏の随想随筆、たとえば初期の『人間・文学・歴史』が出たときなどは、むしろ小説以上に面白いと思つたものだ。

泰淳氏は自分がお寺の出身だということをよく書く、くどいほど氏の文章にはそのことが出てくるし、あるいは氏

が文学者になったというそもその原点は、そのへんにあるのではないかという気さえ、私にはする。氏の住んでいた目黒の長泉院というお寺へ、しばしば私は行つたし、また時に泊まつたりしたので、氏の御両親と会う機会もよくあった。終戦直後、私は田舎にいたが、時々東京へ出てきても泊るところがないので、長泉院のお世話になった。そのころ泰淳氏は夫人と一しよに高井戸へんのアパートにいたと思うが、私は泰淳氏のいない長泉院にも、宿屋のようにして泊めてもらっていた。そのころの話だったかと思うが、お母さん（この人は私も名前だけは前から知っていた、仏教学者、渡辺海旭氏の令妹）が、自分の息子について、兄は魚の学者（当時東大教授）になり、弟は小説家になって、みんなお寺とは縁のないものになってしまった、とこぼしていられたことがある。お父さんは、あまり口かずの多くない、悠然とした人であったが、お母さんは、才気あふれた、男まさりのテキパキした人で、われわれのような息子の友人にも、いろいろ話をしたり、また親切に、何かと世話をみてくれた。

泰淳氏も何かに親切な、というか思いやりのある、心のやさしい人だと私は思っている。とくに終戦後のころの思い出になるが、道ばたや電車のなかなどで、足や手の不

自由な傷痍軍人（？）が、よくあたりの人に物乞いをしている風景が見られたものだ。泰淳氏と一しよに歩いている私は、そんなとき泰淳氏が必ず、いつでも、彼等のそばへ寄つて、若干の金を彼等の脱いだ帽子のなかや、紙箱のなかに入れるのを見た。私などはそういった行為が何かテレ臭くて、躊躇するし、躊躇のあげくは、知らぬ顔をして通りすぎてしまふのが常だが、泰淳氏はいつ、いかなるときでも、サツと近よつて喜捨（？）するのである。そのたびに、この人は心のやさしい、そして卒直な人だと私は思つたものだ。戦争に行かなかつた私と、戦争に行つて生きて帰つた泰淳氏とのちがひ、あるいは仏教に育てられた泰淳氏だということばかりではなく、何か本質的な人間的なちがひではなからうか、と私は反省しながら思うのであった。

私個人にとって、一番泰淳氏に感謝していることは、戦争の末期に、私の母が東京で亡つたときのことである。杉並区に私は住んでいたが（その家へ泰淳氏も時々たずねて来た）、近くにお寺らしいものが見あたらず、どうして葬式を出すかに困つたとき、泰淳氏に電話して（当時、氏はお茶の水の出版協会につとめていた）、宗派はちがうが、母の葬式をするから、お経をよんでももらいたいと頼んだ。泰淳氏はつとめの帰り（？）にケサをもつてきて、それを洋

服の上に着て、葬儀屋のつくつてくれた祭壇の前でお経を

よんでくれた。そのころは交通不便で、田舎の親類は一人も来ず、隣組の人が三人ほどと、アトは愚妻と中学一年をかしらに五人の子供たちが並んでいた。

ただ泰淳氏の宗派のお経のフシ廻しが、私たちの田舎の禪宗のお経のリズムと大分ちがっていたためか、あるいは子供たちがお経というものを聞きなれていなかったためか、折角の読経の途中で、クスクスと子供たちが笑い出した。すると泰淳氏は、「何がおかしい」とちよつと自分も笑いながらたしなめて、また読経をつづけてくれた。この事件(?)はいまもハッキリ私に印象づけられていて、私にとって最大の「武田泰淳の逸話」である。

それから死者のための「戒名」というものをつけねばならないわけだが、その前年に父が田舎で亡っていたし、その戒名があったから、それと対照的な文句を工夫して(私にも中国の文字の素養(?)が少しはあったし)、私が考えてつくった。だがこちらは全然、シロウトだし、専門家の泰淳氏に訂正を乞うところ、これでよろしい、とそのまま泰淳氏は承認を与えてくれた。権少僧都というエライ坊さんから、また息子の親しい友人からお経をよんでもらったのだから、宗派はちがっても、母も満足して成仏して

くれただろうと思った。七日忌のときにも泰淳氏はわざわざ拙宅に、お経をあげに来てくれた(もう迷惑をかけまいと、こちらからは頼まなかったのに)。そのとき有り難いことに、自分のお寺の畑でとれた野菜(お父さんがつくっているということだった)をもつてきてくれた。当時はそんなものを買うこともできない時世だったから有り難かった。その上にまたウイスキーも一本もつてきてくれた。お経がすんでから二人で一ぱいやりながら、私はこのような時世に亡った母も、息子である私も、泰淳氏のお蔭で幸せだったと思った。時世は悪かったが、われわれは若かった。(六月二十六日)

(関西大学教授)

武田泰淳全集の第五巻をお届けいたします。「流人島にて」「異形の者」「ひかりごけ」等の代表作をはじめ、短編小説のあらゆる技法を駆使した諸作品を収めた本書は、貴重な一巻になると存じます。

さて、次回は第一巻(小説1)をお送りいたします。「才子佳人」「廬州風景」など、戦争中に書かれた作品を含む「中国もの」の短編を収めます。中国の古典と風景の抒情豊かな味わいと共に、戦後に向かって開花して行くエネルギーを秘めた作品集です。ご期待下さい。(編集部)

《第五回配本》

第一巻小説1・十月二十日刊 解説・磯田光一

第五卷 目 次

愛と誓い	3
流人島にて	16
異形の者	52
迷路	82
遠くの旗	108
恐怖と快感	122
動物	136
青木さんの過失	152
ひかりごけ	171
紅葉	207
声なき男	224

密室	241
火の接吻	257
ゴーストツプ	268
青黒き河のほとり	281
遊覧地	295
敵の秘密	307
にっぽんの美男美女	327
悲恋	342
燃えあがるみどりの底	354
ウラニウム青春	366
汝の母を!	381
杭を打つ	390
グロテスク	399
誰を方舟に残すか	407

怪人物……………421

独裁者と共に……………425

良妻賢母……………443

解説……………開高健……………459

題……………467,

小

説

5

愛と誓い

矢走僕夫。この信仰の念もゆるが如き青年が、新教の教

団の中でも特に戒律のやかましい再臨派の信徒のあいだで、怖れはばかられていたには、二つの理由があった。第一は、あまりにもたくましくすぎる、顔面の肉づきである。否、額と頬と顎に隆起した、猛々しき肉むらばかりではない。毛虫の如き肩と、厚みのあまった色濃い唇。金つぽ眼と称される、落ちくぼんでいくくせにギョロリとむき出したような妻みのある両眼。それに、髭は四、五日剃らないと、バリバリと音をたてそうな剛毛であった。おまけに、日本人にはめずらしい、おびただしい胸毛である。神の御手にみちびかれる、迷える小羊とは、どうしても見えなかった。羊をねらう狼の狡猾さは、さすがに無いが、羊には目もくれず荒野をノシ歩く熊を想わせた。特に仲間を不安にさせたのは、聖なる泰西のテンペラ絵画に描かれた、十字架上のイエス・キリストの、両側にはりつけにされた二人の強盗の悪相に、どうやら似かよっていることであった。

もう一つの困った理由は、彼の信仰のあらわし方が、す

こぶる狂的だという、いかにも日本のプロテスタントらしい心情なのである。再臨派は、キリストが再び地上に出現したもうこのことを確信する集団であるから、世俗の常識にしたがえば、この宗派そのものが、異常なのだと言える。絶対の菜食主義、勤労と伝道を命としている。一生、独身で通す者も、女性には多いが、結婚は禁じられていない。もちろん、禁酒禁煙。したがって、この教団にぞくする男女は、身だしなみも清潔で、口数もきわめて少い。おごそかな、また熱情をひそめた表情は、彼等に共通している。矢走の場合、まじめな苦悩の告白も、宗教的な歓喜のほとばしりも、何となく、なまぐさかった。「彼は熱烈なのですが、ただどことなく人騒がせな、人物ですね。宗教的な体臭が強すぎるというのでしょいか」長老の一人は、僕夫をそう批評した。「彼は、真剣です。名譽慾や野心や計略で、動くような男ではありません。彼ほど苦しんで、神